第１１３号

芥川だより

発行日＊＊＊2016年6月1日　e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明
発行所
☆ 着物から服へ
着物から服を仕立てます
高槻市芥川町2 －１４－3
TELO７２－６８１－８８７０

＊＊＊＊＊＊＊＊ 一部1００円です ＊＊＊＊＊＊＊＊

罪滅ぼし　自分への問いかけ

運がよかったのか、たまたま自分が生きてきた環境に恵まれていたのか、こうして元気に暮らしている。欲を出さなければ十分に満たされた日々の生活である。

しかし、振り返って自分の生き様を考えるとずいぶん悪戯なこともしてきた。人間であるから悪いことの一つや二つは仕方がないと開き直りながら、一方でそんな言い訳を許せない自分がいるから厄介だ。自分の中で相反する想いが駆け巡りだすと生きる自信が消え、迷いが自分を覆って考えることがおっくうになり、何事をするのも嫌

自分の弱さをひしひしと感じながらも、他方で迷いの境地を何とか抜け出したいとあたりを探す。音楽であれテレビであれ、聞いた瞬間、見た瞬間に、迷いがどこかへ飛んでいき元の黙阿弥になって、自分の気持ちは一変し享楽の世界に浸ってしまう。

なんとも情けないことだが、こんな事を繰り返しやってきた。自分の行いに向き合うことが如何につらく難しいことか。一歩たりとも前進する勇気と忍耐を持ち得なかった。多くの言葉を並べ、どれだけの言い訳をしても、何も変わっていない自分がいることに驚く。

自分という人間の性根が如何にたよりなく弱々しいかを、この歳まで幾度も経験してきた。そのたびに、あきらめと絶望感が心を支配する。しかし、さりげない他人の言葉や行いから勇気を呼び戻して、もっとしっかりしないとだめだ、人生をやり直すことが出来ぬが、これからの生き方で少しでも罪滅ぼしをしなければ…。という想いが湧き出てくるのである。

今夏に行われる選挙は、政治の潮目を変えるにちがいない。とにもかくにも自分で考えて選挙に行き自分の意思を行使し、その選択の責任をおうことだけはしたい

死をめぐるあれやこれ（21）

石川　吾郎

平和の国　日本を殺してはいけない

私たち日本国民は、憲法というものがどういうものかについて、義務教育で正しく教育を受けてこなかったと思います。すくなくとも中年以上の年代についてはそれがいえるように思います。

憲法とは一般国民に向けたものというより、政治権力に向けたもので、政治を行う政府の権力を制限し、縛るものだというのです。立憲主義とはこの上に立った政治原理なのです。恐らくこれはおおかたの大人の理解とは違っているのではないでしょうか。大人たちは自分が憲法を守らなければならないと教えられて、何となくそう思っている。しかし我々が守る必要があるのは通常の法律なのです。憲法を最も守らなければならないのは、国の中で最も強大な権力をもつ政府なのです。

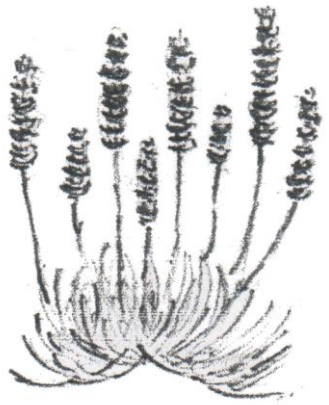
昨年九月、憲法違反の安保法制の強行採決によって、安倍政権はこの国を戦争のできる国にしてしまいました。それまでの政府が、憲法が禁止しているとしてきた「集団的自衛権」を持てるとする、とんでもない解釈により現在の政府は違憲状態にあり、立憲主義を踏みにじった状態にあります。

その上にさらに、安倍政権は、国民の目をたくみに欺きながら、武器輸出や軍需産業をこの国の主要な産業に仕立て「戦争がなければ生きていけない国」に、この日本を作り替えようとしています。（2ページにつづく）

これはまさに定期的に戦争を引き起こしている米国の状態そのままなのです（この具体的な姿については本紙の記事をお読みください）。

七月十日に予定されている参議院選挙は、まさにこのような安倍政権の憲法違反を許し、自民党「憲法改正草案」にあるような人権を制限してナチスなみの独裁へとつながる改憲をさせてしまうのか、それとも安倍政権を追い落とし、現在の日本国憲法の改変を許さず、平和国家としての日本の国を守るのか、という真に歴史的な分岐点になるものと考えられるのです。

ここで大切なのは、この国政選挙で棄権をすることなく、反安倍の改憲を許さない野党に投票して、独裁政治へと向かう安倍政権を倒すことです。この選挙は必ず歴史の転換点になり、我々一人一人の一票が日本の歴史を変えていくものになるのですから。



芥川だより一一三号　目次

		ページ
巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
マスコミが伝えないニュースの側面	伊藤明	2
現代政治を哲学する	祖蔵哲	7
大峰奥駆道	梵店主	8
おっちょこチョイぼけ	ＡＯ	9
素老人☆よもだ帳	坂本一光	10
父のシベリア俘虜記	若山哲郎	12
戦争の思い出	Ｔ・Ｃ・	14
大人の今昔物語	石川吾郎	15
孫ウォッチング	福田圭	16
Ｂ級サラリーマン渡世譚	明石幸次郎	17
見る力と考える力	大江雉兎	18
編集後記	嘉	19
女90年の軌跡	眞糀	20
俳句	土田裕	20

みんなで知ろう日本の危機（10）

マスコミが伝えないニュースの側面

伊藤　明

はじめに

五月の一ヶ月間の出来事でまず挙げなければならないのは、沖縄で起きた米軍軍属による若い女性の凶悪な殺人事件でしょう。沖縄が日本に返還されてからも繰り返されてきた米兵によるこの種の凶悪犯罪や事故に、沖縄の人々の怒りは頂点に達しています。沖縄に集中した米軍基地をなくさない限り米軍関係者の犯罪は無くならない、さらに米兵などにほとんど治外法権を与えている日本と沖縄を植民地とするような日米地位協定の改訂が絶対必要で、現行の努力目標では事態の改善はない、とする翁長知事の抗議は、沖縄の人々の叫びそのものです。政府は翁長知事が要求したオバマ大統領との面会も拒否をしました。そしてサミットの前日の日米首脳会談は、地位協定にはふれずその運営で改善をはかるという、まことに不誠実なものでした（オバマの態度もむろん、不誠実です）。「日米地位協定の下では日本国の独立は神話であると思いませんか」と翁長知事は安倍・管両氏に抗議をしています。

そのサミットといえば、安倍首相が世界の経済状況がリーマンショック前の状況に似ていると、唐突に主張をして、世界の嘲笑を買ったのがもっとも印象的でした。これはむろん参院選の選挙対策のためにこじつけを叫んだものです（サミット後、安倍氏は「私がリーマンショック前の状況に似ているとの認識を示したとの報道があるが、まったくの誤りである」と言って、改めて世界に向けてその常習的な嘘つきぶりをアピールしたものでした）。さらにオバマ大統領の広島訪問。これをすばらしいこととマスコミは一斉に持ち上げて宣伝をしていますが、同時に**オバマは広島に、原爆攻撃の指令を出すためのスイッチを持ち込んでいた**という事実があるのです。何と皮肉で、これ以上ないほどの矛盾でしょう。いくら核廃絶を訴えても、その虚しさは消しようがありません。しかしこれについてマスコミはほとんど取り上げませんでした（ただＴＢＳのニュースキャスターが適切にも伝えたのみです）。

サミット後、安倍首相は厚顔にも消費税増税延期を発表しました。むろん消費税増税は誤った政策ですのでそれ自体悪いことではありませんが、本来ならば消費減税が必要であり、最低増税延期でなく増税中止が必要なのです。この状況は、あれほど必ず増税をする、それが可能な状況をつくりだすと叫んでいたアベノミクスの破綻に他ならず、本来安倍退陣が必要なはずです。にもかかわらず、マスコミもこういう批判をしようとしない状況は、空恐ろしいかぎりです。この安倍政権の態度は、選挙のため権力維持のためには、どんなこじつけでも不合理でもやってしまうという、**反知性主義に貫かれている**といえます。

七月に予定されている参議院選挙まで、あと僅かな期間を残すのみとなりました。この選挙は、平和国家・日本を破壊してきた安倍政権がこのまま権力の座に居座り、改憲を行いこの国を独裁国家にしていくのか、それとも平和憲法の改変を許さずに民主的な平和国家としての日本を守るか、の重大な歴史的な転換点となります。

安倍政権は参議院で三分の二以上の勢力を獲得すれば、現在の憲法を変え、ナチス並、明治憲法並の独裁を許す憲法に作り替えることを虎視眈々とねらっています（緊急事態事項などについて、前号などのこの記事を見て下さい）。このような歴史を逆行させる動きに対して私たちは、選挙で明確に「否」をつきつけなければなりません。

幸い改憲を許さない野党共闘が全国各地で結ばれて、参議院選挙については闘う土台ができあがりつつあります。この参議院選で自民・公明・おおさか維新などといった改憲勢力を追い落とすことがぜひとも必要です。**選挙で国民が棄権をすることなく、野党共闘勢力に投票をすることが求められます。棄権をすることは、改憲を許す方に有利に働いてしまうのです。**

今回は、非常に重要なメッセージを発信している池上彰氏の「なぜ世界から戦争がなくならないのか」という今年前半のテレビ番組の中でも出色のものをご紹介して、ぜひ判断の材料にしていただきたいと思います。

この番組の訴えることを私なりに簡潔にまとめてみると、以下のようになります。

◆安倍政権は昨年九月、憲法違反の「安保法制」を国会で通すことによって日本を「戦争のできる国」にしましたが、さらにその上に**武器輸出と軍需産業振興によって「戦争を起こさなければやっていけない国」**（これは現在の米国の状況そのもの）に、この日本の国をしようとしている、ということになるでしょう。

池上氏は、このことを事実の積み重ねることによって、見る者に冷静に語りかけてくるのです。

この番組は次のＵＲＬで動画として見られます。池上彰 緊急スペシャル「なぜ世界から戦争がなくならないのか!?」http://goo.gl/fusk4q （この動画は三つに分けられています。ただ動画サイトはどこかから圧力がかかるのでしょうか、削除されることも多いので上のＵＲＬで見られない場合には、検索をしてみてください）

番組の構成は以下の通りです。「なぜ世界から戦争がなくならないのか？」

（1）戦争がなくならない理由を、今気になる「最新中東情勢」から学ぶ

（2）戦争という「ビッグビジネス」：二十一世紀の戦争は「お金を得るための戦争」？**軍需産業**とは何なのか？意外な軍需産業とは？「**広告代理店**」と戦争の関係。軍需産業と経済との関係。「**防衛装備移転三原則**」によって日本も「防衛産業」というビッグビジネスに参入する。

（3）戦争をなくすために人類はどんな努力をしているか？：第二次世界大戦の敗戦国ドイツは教育を通して「戦争」をどう伝えているのか。

（4）戦争に向かわせたリーダーたちの言葉

（5）戦争とメディア：日中戦争時の新聞や、湾岸戦争時のテレビなど、歴史からメディアと戦争の関係を解説。

ここではとりわけ重要と考えられる（2）戦争という「ビッグビジネス」と（5）戦争とメディアの部分について要約してご紹介することにします。ここには、現代を生きる日本人なら知っていなければいけないこと、しかし安倍政権がその意味を国民から隠そうとしている重要な情報に切り込み、それを非常にわかりやすく解説をしてくれているからです。

なおこの番組はフジテレビ（関西テレビ系）が（建国記念日の翌日の）二月十二日に放送したのですが、普段ならば政府を擁護する番組を多く作っているフジテレビが放送したこと考えると、その特異性に気が付きます。このような良質な番組が放映されたのは、おそらく池上彰氏ならば視聴率を稼げると考えたもので、その内容についてさすがのフジテレビもその内容に口出しができなかったものと想像されます。

番組は池上氏の解説やプレゼンに対して、数名のタレントが質問や感想を述べるという形で進みます。

◆**「戦争としてのビッグビジネス」**

アメリカの軍用兵士用のズボン製造会社を取材。ここでは防火素材を使った戦闘服を作っている。女性従業員へのインタビュー：「軍への貢献に誇りを感じている」「海外にいるアメリカ兵のために機能性の高いズボンを造っていることに誇りをもっている。」この仕事に対して愛国心と誇りをもっている。

柴田：もし自分が働くとなったら、銃を作るよりズボンを縫っている方がまだ気持ち的には穏やかな気がする。やっていることへの大きな大きな疑問は日々の生活の中でだんだんなくなっていくんじゃないかなって思う。

坂上：アメリカはしょっちゅう戦争をしているような印象があるので、僕は今のビデオを見ると複雑な気になっちゃいますよね。日本はああはなってほしくないと思います。

池上：米軍が戦地に行けば行くほど彼女たちの仕事は増える。そういう関係になっています。実は五十の州それぞれに米軍の様々な基地がある。アメリカ政府としてあえて基地を分けているのです。すると米軍の軍事費を削減しようとか軍隊の数を減らそうとすると、どこかの州の基地が閉鎖される。となるとそこで働いている大勢の人たちの仕事がなくなり、反対運動が起きる。政治家たちが「うちの州の米軍基地を閉鎖しないでくれ」という。結果的に米軍基地が閉鎖されないで済む、ということを最初から計算しているのです。

武器だけでなく、こんなものも戦争の

ためのビッグビジネスになっている。

「**民間軍事会社**」：民間が設立した戦闘要因と警備員の派遣会社。戦争のノウハウを知っている元軍人が多くいて派遣される。二千年代初期には、アメリカで三五社、全世界で三百社以上。これも軍需産業。民間軍事会社の市場規模は推定数千億から十二兆円に上ります。戦争が起きればこれだけのお金が動く。民間軍事会社の社員（戦闘員）の給料は日給十五万近く。二十日間働くと三百万くらいになる。なんで民間軍事会社を使うのか。それは国にメリットがある。もし戦地で死んだり負傷した場合でも、正式な戦死者・戦傷病者として扱わないでいい。正規軍では戦死者などとして扱われる。兵士が大勢死ぬと政府は何をやってるんだ、という批判がでる。民間の兵士は死んでもケガをしても、カウントされないので、批判が出にくくなる。遺族に対する年金や治療費は、六兆四千八百億円（五百四十億ドル）毎年払い続けている。これが民間軍事会社なら死んでも保障金を払う必要はない。長期的に見ればこのほうが安上がり。かつては軍が担っていた業務を民間人や民間企業が肩代わりすることを「**戦争の民営化**」と呼んでいます。本来国同士の争いごとであるはずの戦争をコスト削減のために民間に委ねていいのか、ということが問題視されている。

◆広告代理店の暗躍

他にも意外な会社が戦争をビッグビジネスにしている。それは「広告代理店」です。広告代理店はより多くの商品を売るためのキャンペーンやPR、コマーシャルを作ったりするのですが、戦争のPRをすることをビッグビジネスにしている広告代理店もある。どんな戦争にかかわってどんなPRをしているか。

・一九九七年湾岸戦争の時、ヒルアンドノウルトンという広告代理店が、クウェートのある団体から受けた注文した。この会社は世界三大広告グループの一つ。イラクがクウェートに侵攻をしようとしている時に、事実上クウェート政府が「クウェートへの同情を集めてアメリカ世論を湾岸戦争に誘導してほしい」と発注した。米国民は「クウェートに対するイラクの残虐行為」に不安を感じている。この不安をあおるために議会の公聴会でイラクから脱出してきたという少女に証言をさせて、国民の同情を集めた。これが広告代理店の作戦。（ナイラ証言）しかしこれが完全にヤラセだったことが後で分かった。彼女はクウェート大使の娘でイラクの兵士の残虐行為を偽の証言した。それを大統領も利用して、湾岸戦争を開始したのでした。広告代理店のミッションは成功して、結果この広告代理店はクウェートから十四億円を得た。しかしナイラ証言のウソが暴露された。

◆戦争は大きなお金が動くビッグビジネス

戦争によって大きな利益を得る会社が数多くある。

・**軍産複合体**：軍から軍需産業に武器などの発注があり、軍需産業からは再就職先あっせんなどの利益供与がされる。また軍需産業から政治家への献金・集票など。政治家からは予算をつけるというように、軍産複合体という**癒着構造**ができあがる。これが戦争がなくならない大きな理由の一つになっている。いったんこれができてしまうと、これを崩すことは難しい。

・軍産複合体の例として有名なもの米国のハリバートン社。米軍・国務総省と契約をし、油田の掘削や戦地にある油田の修復など幅広い事業を展開する会社。チェイニーという人物がCEOを勤めていた。ハリバートンのCEOになる前は、（父）ブッシュ政権の国防長官を勤め、湾岸戦争にも関与していた。国防長官を退いたあとは、ハリバートンに再就職をした。しかしさらに、二千一年から（息子）ブッシュ政権の副大統領になる。このチェイニーはハリバートンから数十億という大金を得ている。

そのころ起こったイラク戦争でハリバートンと国防総省との間で大きな契約が結ばれた。イラク戦争時約八千四百億円の発注がハリバートンの子会社にあった。このときには入札でなく、他の企業に一切知らせずに秘密裏に契約が交わされていた。これぞまさに軍産複合体の本質です。（ハリバートンは、米国がイラクへの攻撃を開始するきっかけを作った報道を裏で演出し、しかもイラク戦争で破壊されたインフラの再建を一手に受注したと言われている。）**広告代理店の暗躍**については最近では、東京オリンピック開催のための裏金を広告代理店である電通が関与して、不正に支払ったという話しもあります。広告代理店が闇の世界でうごめいていることに、注目する必要があります。

◆世界的ビッグビジネスに日本も参入！

さまざまな危険をはらむ戦争というビッグビジネスに何と日本も参入できるようになるある政策が施行された。それは「**防衛装備移転三原則**」。これによって、日本も武器輸出できるようになり、その市場を他国と競合できるようになる。

日本の防衛産業の今：「戦争はビジネスになるから終わらないのだ」という世界の動きに日本も参入することになってしまうのでしょうか？決して他人事ではなく日本もそんな動きが出てきている。実はそのきっかけとも言われている政策が二〇一四年四月に定められた「**防衛装備移転三原則**」というものです。

一同：知らない！結構重大なことなのに。

池上：みんな知らないうちに政策が変わったんです。日本のこれまでの方針がこのとき、がらりと変わった。どんな政策なのかを押さえておきましょう。

まず「**防衛装備**」って何、「**移転**」てどう

いうこと？

・防衛装備とは：世界的な基準でいうと、軍需品ということですが、軍隊が戦闘に使用する武器および技術のこと。武器や輸送機だけでなく隊員の食料あるいは戦闘服なども含まれる。概念でいうと非常に幅広いものですが、ここで特に言うのは、武器および技術、この部分なんです。ちなみに日本では、武器とか兵器という言葉は使わない。日本はそもそも「自衛隊は軍隊ではない」ということになっていますから。自衛隊が使うのは武器ではなくて防衛装備ということになる。**世界的には兵器なんですけど、日本としてはあくまでこれを「防衛装備」と呼んでいる。**

・移転とは：権利が移ること。要するにこれを「**他の国に輸出できますよ**」ということ。つまり「**武器をよその国に輸出できます**」という意味になる。

Q：日本というのは「武器を輸出してはいけない国」というイメージが強いですが。

A：そうです。実はこれまで日本はそういう原則をずっと守ってきた。そもそも「**武器輸出三原則**」という原則があった。対象地域に武器輸出を認めないという日本の政策。これは日本で造った防衛装備（武器）は、海外に輸出しません、というもの。この三原則を日本政府はずっと守ってきた。

これは一九六七年に佐藤内閣のときに成立。このときは部分的禁止だった。七六年三木内閣のときに、事実上の「**武器輸出全面禁止**」となった。海外に武器輸出が禁止された理由は、人工衛星打ち上げなど科学研究目的のロケットの軍事転用を懸念。日本が輸出したロケットがいつの間にか軍事に転用されてしまうのではないか。「平和国家日本としては、こういうことに手を貸すべきではない。」と心配して武器は輸出しないことになった。

Q：二年前に「武器の輸出はしてもいい」と変わったことが決まっていたんですか？

A：武器を輸出するんじゃないんです。「防衛装備を移転する」んです。

Q：**武器を輸出してはいけない**というイメージが国民にずっと定着しているでしょ

A：だから「**防衛装備を移転する**」という言い方に変えたわけです。

Q：**それを僕たちのほとんどが知らないって、ものすごく恐ろしいことの気がする。**

A：だと思います。

ただし条件があります。

防衛装備移転三原則の主な内容

①紛争当事国などに該当しない　②我が国の安全保障に資すると判断できる　③目的外使用や第三国移転をしないと相手国が約束した。つまりこれまで武器輸出が原則禁止だったものが輸出可能の原則に変わった。

「**防衛装備移転三原則**」**は武器輸出をすることを可能にした**のです。

政府がこの政策を施行した理由は、尖閣諸島問題や北朝鮮のミサイル実験など、日本が置かれている安全保障環境が厳しさをましているからだといいます。そして日本の安全・平和を維持するために、アメリカ、イギリス、オーストラリアなどと国家間の結びつきを強める。さらに日本の防衛装備の輸出を諸外国から求められたからだといいます。

それだけではなく、「ある団体」からの提言があったからだといいます。その団体とは「**経団連**」。経団連とは、日本経済の広報活動や政府への政策の提言を行う日本の代表的な企業約千三百社が加盟する団体。この**経団連は、武器輸出三原則を見直すことを政府に提言してきました。**

二〇〇九年七月発表「わが国の防衛産業政策の確立に向けた提言」では、その理由として、「国内への投資により開発・生産を行うことは国内産業の発展・経済成長につながる」そして「防衛技術・生産基盤の意義は多岐にわたるが、基盤の維持・強化は国民の安全・安心を確保するため、国として重大な責務である」としています。

ではどんな企業が防衛装備の海外輸出に参加していくのか。一位三菱重工業、二位川崎重工業、三位日本電気、四位ＡＮＡホールディング、五位三菱電機など。防衛装備（の生産・移転）を、これまでは日本国内だったものを、海外に輸出できればはるかにビジネスチャンスが広がります。そうしてほしいと経団連が代表する形で政府に働きかけた。

Q：使う側によって戦車は防衛装備にもなるけど、武器になりますよね。武器ってことですよね。

A：そういうことですよね。ただし、日本は武器はもっていないので。（エッ！一同驚き）

武器をもっているのは軍隊だけ。自衛隊は軍隊ではないので、自衛隊は防衛装備しかもっていない。

Q：戦車は防衛装備なんですね。武器ではない。

Q：でも外国に行ったら殺傷能力のあるものがある。

A：そうですよ、もちろん。

Q：じゃあ戦争に使う・・・

A：つまり国際的な基準でいえばこれは武器。一方でこれまで日本は武器を一切輸出しなかった。こういう企業は日本の自衛隊のために造っていた。マーケットが小さいので単価が高い。日本の戦車や護衛艦、非常に単価が高い。外国の兵器は世界中に売るので大量生産するので安い。いろんな国に輸出すれば単価が安くなる側面もある。この経団連の思惑は安倍政権の経済政策アベノミクスとも合致していた。

二〇一四年、総選挙のときに発表した自民党の公約「自民党重点政策二〇一四」の片隅に「防衛装備庁（仮称）の新設な

ど防衛力整備の全体最適化を主とする防衛省改革を実施します」として公約の中に入っている。

Q：知らないです。

A：この公約通り去年十月防衛省に発足したのが「**防衛装備庁**」。これまで防衛省内に分散していた装備品に関する機能を一元管理した職員約千八百人規模の庁です。その主な役割は、・研究開発、・防衛産業との連携、・装備品などの調達（武器を買う）、・他国との交渉・協力（つまり防衛装備をどこの国に売るかということをする）。こういうことをやっていこうというわけ。**つまり防衛装備品という名の下に、武器を輸出していく。それを国家戦略として進めていこう。そうなればこの産業はさらに利益が増えるだろう。これが安倍政権の経済戦略ということです。**

Q：これは商売ですよね。この防衛装備庁は。

A：国家戦略として輸出を可能にしたという。防衛装備ですが、

Q：日本の防衛装備はどうやって海外に売り込んでいくんですか？

昨年年五月に防衛省後援で、日本初の防衛産業の見本市が横浜で開催された。日本が売り込もうとしているのは、潜水艦（川崎重工）、救難飛行艇など。日本の高い技術の製品の輸出について、アメリカは大歓迎している。

Q：日本は物作りの国。日本の力を結集して輸出できるとなったらコストも下がってすごい産業になっちうんじゃないですか。

A：その可能性はあるということ。

Q：すごく景気がよくなるかもしれない。

A：**世界のどこかで戦争が起きれば、景気がよくなる**、ということ。

Q：国をあげてという感じに、ここからなっていくわけですよね。

A：そうですね。去年十二月に防衛省が出した**二〇一六年度の防衛費は、「初の五兆円超」過去最大**となっている。安倍総理は防衛力を上げるといってこういう言い方をしている。（二〇一五年六月二十六日衆院平和安全法制特別委員会）日本防衛力の必要性について、紛争を未然に防ぐ「抑止力を確かなものにしていかなければならない」と説明。防衛力は戦争を仕掛けられないようにするための「抑止力」にするのだと。キーワードは「**抑止力**」。世界のどこの国も「戦争をするために軍備を増強するとは言わない。いずれも「抑止力を高める」と言って軍事費を増やしていく。日本としては、「日本が攻められないようにするため」「これだけのもの（防衛装備）をもっていれば、いざ「日本を攻めてきたらひどい目に遭うぞ」それだけのものを私たちが持つことによって「外国からの侵略を防ぐ」これが「抑止力」。ただし日本のことを信用していない周辺の国にしてみれば、日本が防衛費をふやすことは、何か良からぬことを考えているのでは？と勝手に考えて、自分の国も抑止力を高めようと言って、軍事費を増強させると、今度それが日本にとって非常に危険だということで、日本も抑止力を高めよう、ということをやり始めるとこれもまた危険だ。抑止力という概念をどう使うか、どう押さえるかということ、これも政治の大きな課題です。」

◆景気がよくなるという話しですが

坂上：きれい事になってしまうが、（防衛装備の移転で）景気が良くなるんだったら、我慢していたいなと言う気になる。もっと別のところでがんばれないのかな。**どんどんアメリカに寄っていくのか、イコール戦争に寄って言っているというのか、怖いですね。**

千秋：日本は「戦争しない」っていってるけど、自分たちは誰も死なないけど、どこかの国の人が死んじゃうことで、日本が豊かになっていくのを、バンザイバンザイとも言えないし、でも経済はよくなったほうがいいかも知れないし、もしかしたら**十年後にアメリカみたいに、普通の主婦が軍服を作りながら「国のためになってる」って言っているかもしれないと思いました。**

◆メディアと戦争の関係

国民を熱狂させ、戦争をあおったのはメディアにも責任があったのではないか。かつての日本もそうだった。日中戦争が起こる前、大阪朝日新聞は中国を占領しようとしている日本の軍部を批判していた。

記事：「少なくとも国民の納得するような戦争の脅威がどこからも迫っているわけでもないのに、軍部はいまにも戦争がはじまるかのような必要を超えた宣伝に努めている。」（一九三一年八月八日付け）

当時日本軍部は、中国の満州を手に入れようとして、中国との戦争の準備を進めていた。それを批判している記事です。ところがこういった記事を載せたことで、「朝日新聞は、反日的な売国的な新聞だ」「新聞を買うのを止めよう」という不買運動が起きて、大阪朝日新聞、発行部数が激減する。すると二ヶ月後、突然大阪朝日新聞の編集局長が方針を変えます。戦争賛成路線に変えた。その結果こんな記事がでる

「満蒙の独立　成功せば極東平和の新保障　満州に独立国の生まれいずることについては歓迎こそすれ反対すべき理由はない」（三一年十月一日付け）。満州に日本の傀儡（かいらい）国家をつくることを歓迎する、と一八〇度方針を変えた。これによって大阪朝日新聞は発行部数が伸びた。不買運動をおこされて、ビジネスとして成り立たなくなるので、方針を変えて読者に迎合をした。その結果部数が増えたということです。

日中戦争をきっかけに広がったメディアがラジオ。徴兵された兵士の家族が、父や夫や息子がどうしているのだろうか、日中戦争の状況を伝えるラジオを聞くことになる。ニュースを知りたいということで、大勢がラジオを買って耳を傾けるようになった。ラジオ放送は戦争報道によって聴取者が激増した。戦争中、歌謡曲を流していた番組が、軍歌だけを放送するようになったり、国民を戦争へとあおりたてるものに変わっていったという歴史がある。

テレビはどうか。一九八〇年に一日中ニュースを流し続ける画期的なテレビ局ＣＮＮアメリカで開局。九一年湾岸戦争がはじまりＣＮＮはこれを報道する。その後ＦＯＸニュース。二〇〇三年イラク戦争がはじまる。戦車の上から生中継を行った。戦車に乗っているアメリカ軍の兵士の視点からの中継をして、アメリカの視聴者はアメリカ軍と一体化する。軍とメディアが一体になった報道の仕方。愛国的な報道をすることでＦＯＸニュースはＣＮＮを抜いた。

ところが戦争報道を人気取りのために使わなかったテレビ局もある。八二年フォークランド紛争の時のイギリスの公共放送ＢＢＣ。ＢＢＣは「イギリス軍対アルゼンチン軍」と報道した。そうしたら保守系の議員から「何でわが軍と呼ばないのか」と追及された。これに対してＢＢＣは「愛国心に関して説教を受ける筋合いはない」として客観的な報道姿勢を変えなかった。**報道機関が政治に左右されてはいけない。**

◆池上のメッセージ：

昔も今も勝手な思想を他人に押しつけようとする勢力がいる。それよって戦争が起きる。あるいはそれに対して二度と戦争を起こすまいとする努力も続けられている。しかし戦争で利益を得る組織がいるということも事実。そこにはメディアも含まれているのではないか。

メディアによって実態が隠されたりゆがめられたりすると、私たちは戦争について正しく認識することができない、あるいは正しく反省すること難しくなるのではないか。この戦争はどちらに非があるのか、といったことに対する客観的な評価ができなくなるということは大変危険なこと。戦争中の日本の新聞のように、受けての気分がよくなるように、という報道ばかりしていると私たちは現実を見失ってしまうおそれがある。だからこそメディアは戦争報道の仕方について自らを戒めて、権力に利用されずにきちんと事実を伝える、そういう役割を果たさなければいけないんだと思います。

◆まとめ

この番組は、**安倍政権が「安保法制」で日本の国を「戦争のできる国」へと変えていこうとするのと同時に、さらに国民の大部分が知らないうちに、武器輸出を推進して軍需産業に依存する産業構成にして「戦争がなければやってゆけない国」へと変貌させようとしている**ことを、鮮やかに浮き彫りにしています。私がこの番組が、出色のものだと考えたのは、まさにこの点にあります。

このように、国民の大部分が気が付かない裏で想像を超えて、この国を戦争に近づけ、戦争に依存させるように、国の作り替えが進行しているのです。

この動きの最大のものが**改憲**だといえます。**安倍政権が企む改憲は、自民党の改憲草案に見るように、人権を制限して権力を一人の人間に集中させ、明治憲法ないしナチスなみの独裁体制に、この日本の国を作り替えること**です。

七月十日に予定されている参議院選挙が、安倍政権とそれを支える経団連などが、この国を戦争と独裁国家へと向かわせるのを止めて、**平和の国日本を守るのかどうかの、歴史的な分岐点になることが予想される**のです。

ぜひこの選挙で棄権することなく、安倍政権と改憲勢力を追い落とす野党統一候補に投票をして頂きたいと思います。そのための判断の材料として、この小文をみなさんでぜひ利用していただきたいと思っています。

哲学屋のつぶやき（23）
「核なき世界」を哲学する

祖蔵　哲

念願かなったというか、遅すぎるというかオバマ大統領が先月、広島を訪問した。Ｇ７伊勢志摩サミット後というタイミングであったが世界中の話題を集めた。そのサミット自体は日本がホスト国にも関わらず、安倍首相は自分の政治課題である消費増税再延期のために世界経済の独善的解釈を行い、参加国から大いなる批判をうけ、おかげで主要なテーマである税金回避対策の国際協調など何も決まらず失敗であったが、この訪問の出来事それも霞んでしまった。それほど世界的に大きな出来事であったが、特に当事国アメリカでは物議をかもした。アメリカからは過去にも 何人かの政治的要人が当地を訪れているが現職の大統領としては初めてである。オバマ大統領は二〇〇九年一月に就任して早々の四月にＥＵ首脳会議で訪れたチェコのプラハで核兵器の廃絶に関する「核なき世界」演説をし、そして同じ年の十月ノーベル平和賞を受賞したという特殊なケースの人物かもしれないが、アメリカを代表しての行動に変わりはない。プラハ演説では核兵器を使用したことがある唯一の核保保有国として道義的責任があると発言した。今回の広島演説では、この広島原爆投下が道義的な目覚めの契機になったという遠回

しな表現でプラハ演説と同じことを言った。これは依然としてアメリカに根強く残る「原爆投下早期戦争終結論」「原爆投下正当化論」に配慮したもので「明確な謝罪」を避ける意味が大きい。

ここで我々日本人が注意しなければならないのは「謝罪」という言葉の持つ意味の違いである。日本は世界から見て特殊だということの例えとして「ガラパゴス的」という形容詞が使われる。日本独自仕様の携帯電話のことを「ガラ携」というのはこのことからしいのであるが、外部の環境から隔離されて独自の生態系を持ったダーウィンの進化論で知られるガラパゴス諸島の特徴を同じ島国の日本の精神構造に当てはめた表現は面白い。さて、その「謝罪」も日本は世界に対して「ガラパゴス的」であるのです。日本では「謝罪」と は「罪や過ちを詫びること」である。「詫びる」とは「当人が反省し許しを求めること」とある。そしてこの許しとは何かというと「なかったことにする」ということである。典型的な日本的謝罪は「水に流す」こと、つまり「当の行為は無かった こととして和解する」ということなのである。これが「ガラ謝罪」である。しかし、世界基準はこうではない。謝罪は全面降伏の意味である。無かったことでなく、逆にこれを事実として認めることから 始まり相手に裁きを任せることなのである。だから日本人以外は簡単には「謝罪」しない。謝罪するかどうかはその後の損益のバランスの中に存在するのである。

さて、不幸にも核兵器は広島と長崎に二度使われてしまったのであるが、その後世界はこの核兵器の恐ろしさを知りその規制に乗り出した。しかし、オバ マ大統領が述べた「核なき世界」は実現するどころか、核保有国は増加しています。そして、今世界の核兵器は何百回も地球を破壊できる規模の数になっている という現実に直面しています。

核抑止の理論というものがあります。これは核兵器がそもそも最終兵器であり、どちらが使ってもお互いが滅びるからお互いに使用を抑制するだろうという理屈に基づいています。これに関しては戦略的意思決定として「ゲーム理論」なるものがあります。しかし哲学的に考えるとそれらはジレンマとして考えられるケース が多いのです。ジレンマとは二者択一の状態でどちらもデメリットをもっている時のことを言います。つまり、莫大な費用をかけて自ら使う見込みのない核兵器を保有するデメリット とそしてそれを使用しても自らも破滅するというデメリットです。有名な例として「囚人のジレンマ」というものがあります。長くなるので説明は省略しますが、この場合は、相手に裏切られるかもしれないという懸念や恐怖から自分が裏切るのではなく、相手が黙秘しようが裏切ろうが自分は裏切ることになるという点にあります。このため仮に事前に相談できてお互い黙秘をすると約束していたとしても、その約束に拘束力がない限り、結局裏切ることになります。このジレ ンマが意味するのは核抑止論という非常に微妙なバランスの上に成立しているもので非常に危ういということです。

確かに「核なき世界」は素晴らしいことで、理想であれ実現せらるべきものとして世界は認知しています。しかし、それは真実の平和をもたらすものでしょうか。「核なき世界」を主導しているのはどこの国でどのような利益のためでしょうか。「核なき世界」を望んでいるのは通常兵器が無力化されることを恐れている国々です。世界の最強の軍事大国、アメリカがそれを望むのは当然のことでしょう。我々、世界が望まなければならないのは「兵器なき世界」のはずです。唯一これを言う資格のあるのは国は、憲法第九条をもち、核被爆国であるこの日本でしかないはずですが。

大峯奥駆道（2）

梵店主

しょっぱなから恥ずかしい話だが、家内の指摘で前号の一部を訂正しなければいけない。退院後まもなくの年末に愛宕山にいく相談をしたと書いたが、一年後の年末である。確かに退院した年末は、それどころではなかった。

少し酒を飲んだり目を使うことをしたら目は充血し一週間ほど治らず、治ったかと思えば、また充血するといったあんばいであった。足の方もまともに歩けずよたよたとふらつきながら歩いていた。

親しい客の一人は、よっちゃんの歩く姿を見て、なんとも言えず悲しくなったと言った。商店街の人たちも、退院はしてきたがよっちゃんの姿を見て、そう長くは生きられないだろうと噂をしていたにちがいない。商店街の役員をしていたが、とても役員会に出れる状態になかった。毎回委任状を出して欠席をしていたありさまであった。

また、親しい写真館の婆さんは、数年後、よっちゃんが駅のホームを小走りして電車に乗るのを見て涙が出たと言われたぐらいだから、周りの人から、もうだめだろうなと思われていたのである。

そんな状態だから、退院した年末はとても愛宕山にいく気にはなれなかった、というのが真相である。

日記をつけておれば正確に書けるので

あるが、そんなこまめな性格でないからお許しを願いたい。

さあ、話を始めよう。

退院して一年たった年末に、大江君と熊さんにお願いして愛宕山へ正月二日に登る事になった。しかし、病み上がりというより、病人といったほうが正しいようなよっちゃんであった。そんな彼の体力を察して、熊さんは心配してよっちゃんに翌日電話してきた。

「愛宕山に登れるか試験してやる。三〇日に六甲山へ行こう」即座によっちゃんは

「わるいなあ、つき合ってくれるんか」と喜んで約束した。

山陽電鉄の須磨浦公園前駅で七時に待ち合わせの約束だから、よっちゃんは朝早く四時に起きて準備し愛妻に阪急の園田駅まで車で送ってもらい、五時過ぎの新開地行に乗った。

新開地で山陽電鉄に乗り換え六時ごろに須磨浦公園前に着いた。一時間も早く着いてしまった。改札口を出て見る瀬戸内の海は朝靄の中にうっすらと見えた。よっちゃんは初めて来た須磨浦の海岸であったが、これから始まる山登りのことでかなり緊張し風光明媚な景色を味わう余裕もなかった。

よっちゃんは、これまで北アルプスなど多くの山を登ってきたのだが、六甲山はあまり歩いた記憶がない。千メートル足らずの山だからバカにしていたことも事実だ。まして正月に登る愛宕山などは、一度も登ったことがなかった。その愛宕山に登るために、六甲山で訓練する、いや登れる体力があるか試験を受ける、などとはゆめゆめ思わなかったのだが、よっちゃんの病状を考えれば当然である。なにしろ、階段が登れないほどに弱った体が、退院して一年で山を登れるほど回復しているのか、友人が心配するのも当たり前である。よっちゃん自身も大変心配であった。

いくら低山といえども山の危険はある。まして十二月の三〇日だ。雪が降るかもしれない、寒さが厳しいかもしれない。山の怖さは十分すぎるほどよっちゃんはわかっていたからである。

病気になったときに、もう山に登ることはないだろうと山の装備は捨てていたので、取り急ぎスーパーの雑貨売り場で買ってきた四八〇〇円のザックと一〇〇〇円で買ったウールの手袋、押し入れの奥にあったスキーのストック、捨てられずにあった昔の皮の登山靴、といった具合で急ごしらいの姿である。

よっちゃんも自分の身なりを見て、なんとも言えないような格好だとはわかっていたが、そんなことより果たして登れるのか歩けるのか、途中で歩けなくなったらどうするのか。病状が急変したらどうなるのか。不安がいっぱいで格好のことなどどうでもよかったのである。いやそこまで気が回らなかったのだ。

連載「おっちょこチョイぼけ」（39）

――昭和女、どっこい日記――

二重人格で生き抜く、ワ・タ・シ…の巻

気がつけば、二重人格。いろんな局面で、本性を隠して生きている。トシを取ったんだから、本音で生きていきたい、と思うが、人生なかなかままならない。

ついこの間、家の中でバタバタと用事をしていたら、ピンポンが鳴って、お兄さんがドアの外に立っていた。

「この近辺で、明治の宅配の商品をご紹介して回っているんです」「すみません、ここは仕事場にしていますので、そういうものは…」とことさらに忙しそうに早口で言って、ドアを閉めようと思ったら、お兄さんがヌッとビニール袋を差し出して、「じゃ、これもらって下さい」と言うから、つい受け取ってしまった。配りきってしまわないと帰れない、という感じの渡され方だったし、タダでくれるものは何でももらいたがるタチなので、「ああそう、じゃ、ありがとお」と後先考えず、ビニール袋に手を出してしまった。

家の中で開けてみたら、明治プロピオヨーグルトR1ドリンクタイプ、一〇〇ミリリットル（ちっちゃいビンである。ちなみに一二四円）、同様のクロレラ乳酸菌、あともう一本入っていたが、忘れた。

タダだから、「いやあ、こんなんもらっちゃった～」と気をよくしていたが、別に飲みたい気もしなかったので、冷蔵庫に放り込んで、忘れてしまっていた（ビールだったら絶対に忘れないし、忘れる前に飲んでしまうが）。

そしたら、三日後ぐらいに、再びピンポン。この前のお兄ちゃんがにこやかに「お味、いかがでした！」と言うではないか。「いかがでした？」と問われたら、答えは一つ。「あ、おいしかったですよ」。クロレラは飲んだことないが、R1は健康オタクなので、一時期、スーパーでヨーグルトタイプを買って毎日食べていた。だから、味ぐらい見当がつくし、「もらったビニール袋のまま、冷蔵庫の野菜室の底の方に埋没しているけど、よかったら返そか」とは言えないではないか。

お兄ちゃんはさらににこやかに、「三本のうちのどれがお好みでしたか？」と聞く。仕方がないので、「すみません、まだ全部飲んでないんで」お兄ちゃんはえっ？という顔をしたが、「今日は空き瓶を回収させていただいているんです！」とさわやかに言った。私は慌てて、「ごめん、全部飲んでから返すから」とぺこぺこ頭を下げて、ドアを閉めた。心の中で、（何であんな欲しくもないドリンクを受け取ってしもたんやろ！）と自分のケチな強欲さを呪いながら。

それでも、クロレラはちょうど家にいた友だちに飲んでもらい、私もR1を飲んだ。あと1本、風呂上りに飲んで（牛乳みたいなヤツだった）、瓶をきれいに洗い、もらったビニール袋に戻して、五〇

○円玉を入れておいた。
出掛けるときには、ドアノブに吊るしておこう、と考えたのだが、結局は出掛けるときは、そんなことは忘れてしまい、数日後、再び、ピンポン。
例のお兄ちゃんがやはりにこやかに「どれがお好みでしたか？　実はご近所の皆さんにはご注文いただいたんですよお」と言う。私は空き瓶を返して、「ごめんね、ウチは留守も多いし、宅配は…。だから、いりません」。
お兄ちゃんは再び、えっという顔をして「ここ、皆さん、とってくれはったんですよ」と言う。「そう、でも、ごめん。私はいらんから」。お兄ちゃんは「はあ？」という顔になって、「皆さん、飲まれた方はとってくれてるんですよ」。ここから、私は二重人格になった。本心は「アンタが勝手にくれたんちゃうんか？　私がアンタにくれって言うたか？」と言いたいところを、「そうやね、飲ませてもらったんやから、お金払うわ。なんぼ？」「それ、受け取られへんことわかって言ってるんでしょ」とお兄ちゃん、怖い顔だ。私の本心「知るか、そんなこと」。
二重人格の私「そうなん。でも、悪いから、せめて飲んだ分を」。
お兄ちゃん「みんな、とってくれてはるんですよ」
本心「ほんならよかったやんか。一軒ぐらいとらんでもどうってことないやろ」
二重人格の私「そう。でも、うちは本当に申し訳ないんやけど」
本心「私はね、いまフジッコのカスピ海ヨーグルトに凝ってんの。それに、糖質制限してるから、砂糖入りはいらんねんてば！」
お兄ちゃんはお試し期間分だけでも申し込めとしつこかったが、私が断り続けると、「こんなん、帰れませんわ」とすごんだ。私の本心「ほんなら、一生、そこにいてろ！」二重人格の私「とにかく…、悪いけど。もらってしまって悪かったけど、余ったから受け取ってって感じかと思って」。お兄ちゃんの中の何かが切れた。「余ったから？　こんなん言われたん初めてや！　上司に言わな！」と携帯を取り出して、耳に当てながら帰って行った。
あああ、知ってんのんかな、明治のエライさんは。末端で、こんな会社のイメージダウンにつながることが行われていること。ま、三本受け取った私が悪かったんだけどね。タダほど高いものはないって言うのに。それに正直、怖い気もした。「何かされるんじゃないか」と。だから本心を言うのではなく、二重人格を貫くんだけど。
それにお兄ちゃんは営業トークを間違った。私は「みんなとってるから、とれ！」というのでは心が動かないタイプなのだ。「だれも、とってくれないから、本当にオレ、困ってて」と言われたら、「そら、気の毒な…」とお試し期間の申込みぐらいしたかもしれない。最初のにこやかさから一変したお兄ちゃんの表情を見て、私は怖くなると同時に「こんなヤツを喜ばせる義理はない」とかたくなになった。
強引な売り込みの人だけを相手に二重人格をしているワケではない。親友F子にも二重人格モードで接してしまった。引っ越したばかりのF子のコーシャハイツにゴキブリが大量発生し、「ゴキブリとコオロギはどこが違うん？」というスタンスのF子もさすがに辟易。バルサンをたく、というので、後片づけを手伝いに行ったら、やっぱり死んでいた。
私の本音は「キャー、だれか、だれかゴキブリ！　何とかして！私の視界から消して！」と叫びたい方なのだが、バルサンにやられて、バタバタしているそいつらを平然と紙でつかんではビニール袋に入れた。
F子が「ゴキブリ、苦手やったんちゃうん？」と気遣ってくれたが、私は「弱ってるゴキブリ、既に死んでるゴキブリなんか平気やで」と答えた。親友に対する、私のささやかな友情の印だ。で、その晩、私は大量のゴキブリの夢を見て、気持ちが悪くなった。本当は死ぬほどキライだ、ゴキブリも宅配ドリンク売りの兄ちゃんも。

（AO）

素老人☆よもだ帳（27）

坂本　一光

◆『すべてが変わるようにみえても、実は何も変わらないと彼は信じていた』、または、『世界は変える必要があるし、変えることができる』について

表題に引用したボードレールの言葉は、加藤周一の評論『教科書検閲の病理』の冒頭に添えられた言葉である（加藤周一セレクション5、平凡社ライブラリー、一九九九年。なお評論の初出は一九八二年）。ボードレールの原典（ボードレール、プレイヤード版全集第二巻、七五八頁）に当たっていないので、どういう脈絡の中に置かれた言葉なのかを私は知らないが、評論を読みこの言葉を知ったのは二〇〇九年、その時この言葉は当時の時代風景に妙に合っていると思ったものである。折しも二〇〇九年は、太平洋を挟んで向き合う二つの国、日本と米国で政権交代があった年である。それがどのようなものになるかを知る由はもちろんなかったが、この言葉は、日本に誕生した民主党政権と米国に生まれたオバマ政権の結末を象徴することになるかもしれないと私には思えた。
そもそも二〇〇九年の政権交代の裏に何があったか。それまでの政権のもろもろの失政や選挙制度のあり方など要因はあるだろうが、劇的な変化が起きたから

には、政治の指導者たちの言葉が、生活の基本的な面で何かを変えたいという人びとの心の深層にある切実な願い、つまりは人びとの真実に触れたからである。そうなるためには、政治家の言葉は、一方で小泉元総理の構造改革と同様にChange! Yes, we can! とあいまいでよかった。他方で何をどう変えるのか、改革の基本理念に基づいた重要政策の体系的構造を示さず個々の政策羅列のマニフェストを提示すれば十分であった。曰く、『高速道路無料化』、曰く、『教育職員免許状更新講習の見直し』等々。

しかし政権交代があっても、現状を変えたいという人びとの深い願いは実現しそうにないことはすぐに露呈された。抑止力を考えれば沖縄普天間基地の国外移転は難しいと首相は言った。プラハで世界からの核廃絶を叫んだオバマ大統領は、ストックホルムでは平和のために戦争が必要なこともあると世界に向かってくぎを刺していた。こうした政治は、きっと現実をよく踏まえているのだろう。しかし、現実と区別された、しかし空文句に終わってしまうような理念ではなく必ず実現するという理想を持たなければ、政治は現状に埋没し、改革の小さな一歩も踏み出すことはできない。課題を明らかにする現実分析は、現実を、それと区別された実現すべき理想と対比することで初めて有効になるものだからである。要するに、次は何して遊ぼかな、という子どもなら誰に教えられなくても知っていることを知らない政治がある、ということである。

加藤の前記評論は、『…もっと根本的な解決法しかない。それは、「経済大国」が、次の段階として「軍事大国」へ進むか、「福祉大国」へ進むか、日本国民みずからが選択するということである』と結ばれている。三十四年前の指摘が今に当てはまることに驚く。民主党政権はすでに安倍自公政権にとって代わり、この政権は戦後の日本の政治の一つの極端の崖っぷちに向かって突っ走っている。オバマ政権は二期目を終わろうとし、彼の国から流れてくる大統領予備選挙の報道を見る限り、「米国よ、お前もか」、としか言いようがない候補が国じゅうを席巻している。それぞれの国民はこれまで何を選択してきたのか、そして今度は何を選択するのか、国民自らが選んだ政治であることが改めて問われる時が来ている。

世界は変える必要があるし、変えることができる— Change! Yes, we can! と扇動する気はないが、時至れば世界を揺るがし動かしてきたのは、かすかな、しかし人びとが深いところでずっと持ち続けてきた希望なのだろうと思う。自覚された希望、それを実現するために可能な一歩を踏み出す、ぎりぎりのところでも行動を伴う希望である。『私には夢がある』、そうキング牧師は言った。『いつの日にか、ジョージア州の丘で、かつての奴隷の子孫と奴隷主の子孫が兄弟として同じテーブルに座るという夢がある。私の幼い四人の子どもたちが、いつの日にか、皮膚の色ではなく人格によって評価される国に住むという夢がある』(ワシントン大行進二十万人集会におけるキング牧師の演説、一九六三年八月)。彼はこのみずから夢と呼んだ理想と信念を掲げ、非暴力を貫き、国じゅうを歩きつづけた。彼は暗殺されたが、米国の歴史を大きく一歩前に進めた。米国がオバマを大統領に選んだのはこの演説のおよそ半世紀後である。オバマ大統領は就任間もない二〇〇九年四月プラハの地で、『米国には核兵器を使用した唯一の国として核廃絶に対し道義的責任がある。私は信念を持って表明する、米国は核兵器のない世界の平和と安全を追求する』と演説、同年十月ノーベル平和賞を受賞した。同時にこうも言っている。『私は甘い考えを持っていない。この目標は直ちに達成されるわけではない。おそらく私の生きている間は無理であろう。だが、世界は変えられないという考えは我々の敵である。世界は変えられると主張しなければならない』と。

言葉の幅は広く深いが、政治家はだれも現実主義者である。まして自国のみならず世界の権力の頂点に立っていると自覚しているであろう米国の大統領は、自らが語る夢は夢、現実に取ることができる(または取ることができない)行動は行動と明確に区別しているだろう。彼の演説は、個人的にみれば、誠実で率直な心情や信条、信念の勇気ある吐露なのかもしれない。それにしても演説内容は我が首相のものに比べれば格段に質が高く、大統領の助言者または補佐する者の質の高さを伺わせる。この質の違いは政治に対する彼我の姿勢の違いを反映していると私は思う。それは認めたうえで言うのであるが、人は、とりわけ政治においては、何を言ったかではなく何をしたかで評価されるのである。プラハ演説から七年、大統領が何を言ったにしても米国の核廃絶に対する姿勢は以前と変わらず、核兵器廃絶は永遠の彼方の目標なのかと思わせるものに過ぎなかった(日本政府も然り)。国連の場でも世界の圧倒的な流れになっている核兵器禁止条約の国際交渉に踏み出さなければ、大統領の言葉はせいぜい善意あふれる空文句に終わるだろう。何を言ったかが何をしたかそのものにもなるのは、権力とは無縁の一個人においてだけである。素老人だって、

満開の桜幾たび数えれば
戦もテロも核もなき世か

自然から核解き放ちし人間が
核なくせないはずがなかろう

こんな歌を読むときがあるのだ。

しかし、そうであるにしても、米国大統領をして核廃絶を口にせざるを得ない地平に人類は今頃やっと立ったと言えるのかもしれない。大帝国といえども、微力なる数多の人びとと微力なる数多の小国家の真っ当な願い、希望の前には、自

らの理不尽さとそれゆえの無力を自覚せざるを得ない時代が来たのかもしれない。そんなことは、個人には、歴史を少し振り返ればすぐにわかることではある。世界は変える必要があるし、変えることができる。そのように時代は進み変化してきたのだ。この一五〇年を振り返るだけでも、たとえば、一八六七年明治維新によって絶対不変と見えた二六〇年間続いた江戸幕府が崩壊した。一九四五年には大日本帝国は敗戦を迎え、一九四七年大日本帝国憲法に代わり日本国憲法が制定された。時代は進み一九八九年にはベルリンの壁が崩壊、いわゆる東欧革命があり、一九九一年ソ連邦が崩壊した。冷戦の一方の極にあった覇権大国の崩壊は、プラハの春を戦車で踏みにじった二十三年後のことであった。冷戦が終了したとき、社会主義は死んだ、資本主義万歳論が世界を席巻したが、わが国では『想像力　資本主義』の広告まで出た（三陽商会）。『想像力　資本主義』の国の原発事故は二十年後のことであった。

以上述べてきたとおり、二〇一六年五月二十七日のオバマ大統領の被爆地広島訪問のニュースを見ながら、私は七年前の彼のプラハ演説、その直前の彼我の政権交代の頃の感情を思い出していた。広島でオバマ大統領が何を語ろうと（これを書いている時点で私は彼の演説の全文を見ていない）、私の感情はおそらくここに記したことと大きくは変わらないだろうと思う。具体的な一歩を踏み出す演説はできないだろうと思うからである。それにしても私が残念に思うのは、神の国であることを示すためでもないだろうがサミットを伊勢・志摩で開催するのではなく、被爆地広島で開いてほしかったことである。確かに外相会議もあったしオバマの訪問もあるけれども、被爆国日本としてどうせならそうあって欲しいと願ったところである。オバマ大統領の広島演説については機会があればまた触れることにしよう。

さて、先ほども述べたが、その国の政治はその国の国民自らが選んだ政治であることが改めて問われる時が間近に迫っている。七月に実施される参議院議員選挙はその機会である。憲政の邪道といわれようが、政権の選択によっては衆参同日選挙もあり得るのかもしれない。アベノミクスの失敗を認めず消費税増税再延期をせざるをえなくなれば、前回と同様に国民の信を問うというまるで手柄話のような居直りに出る可能性があるからである。その布石であろうか、伊勢・志摩サミットで首相は、世界経済はリーマンショックの前夜と同様の危機にあると主張したものの他の首脳の大方の賛同は得られず、増税再延期の大義名分（リーマンショック級の世界経済の危機または大震災級の災害がない限り、二〇一七年四月には必ず消費税を一〇パーセントに上げる）を失った。

いずれにせよ七月には、昨年来、集団的自衛権行使容認の閣議決定という解釈改憲を強行し、いわゆる戦争法を成立させた政権をこのまま存続させるのかどうかが鋭く問われるだろう。『日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した』と前文に謳い、第九条において世界に先駆けて戦争を放棄した日本国憲法に改めて立ち返る政治を取り戻すのか。それとも大統領が何を言おうが米国の核抑止力の傘の下で世界中のどこにおいても自衛隊が米軍と行動を共にする、つまりは戦争をする国家になるのか。誰もがどちらかを選択しなければならないだろう。もちろん、自分は別の選択をしたのだと言うことはできるが、そう言ってみても今回だけは客観的にはどちらかを選択したことから逃れることはできない、と知るべきである。最近刊行された『平和万葉集巻四』に次のような歌があった（『平和万葉集』刊行委員会、光陽出版社、二〇一六年）。

ああ子らにごめんなさいを言ふだけで
許さるると思ふな戦をとめず
木村雅子

どのような成り行きにてもわたくしは
兵士の母と呼ばれたくない
久々湊盈子

この国の未来を決めるのは国民である。

（かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人）

父のシベリア俘虜記
「流転八十年」（2）

若山　哲郎

昭和三十九年三月の広島県知事発行の復員証明書によると父は昭和十五年十二月一日に二等兵として野砲兵第五連隊に入営している。事実上の日米開戦である真珠湾攻撃が翌年の昭和十六年十二月八日であるから、大陸侵略としての日中戦争がこの時期から切迫していたのであろう。なお、学徒動員は昭和十八年からであり、父はすでに学生ではなく教師であったので兵役義務は免れなかったのである。そして十六年四月に第三十九連隊に転属し、主に中国大陸湖北省を中心に転戦している。軍隊での階級は最初は前号であった通り平兵隊であったが昭和十七年の見習い士官から毎年昇進し十九年十二月には陸軍大尉になっている。これも戦況の悪化による兵力の減少の影響であろう。父は、最初は一兵卒としてスタートしたが結局は師範学校出の大学卒として幹部登用されたのであろう。当時は中隊長だったと話していたが相当な位である。しかし、結果的には敗戦国となり、戦争責任が問われる立場になる時、この地位が良かったのかどうか。さて、記録の続きを紹介しましょう。いよいよ戦場に立つことになりますが、最初はその状

況の短歌や短詩に始まります。これらは状況記録よりも心に迫る表現力があります。

流転八十年

戦場に立つ

戦時中の学生出身と若者のほとんどが奉国の燃えるファイトと純情の持主といってよい。一億一心進んで国難に挺身する可憐な青少年で、男女老若献身の日々を送って、この戦争は永久に続くであろうことを覚悟し、天皇と御国の為、滅死奉公の鬼ともなっていました。

国民全体が火の玉となり、後ろを向く者は不具者と言えどすべて売国奴と言われ、そんな日本人は唯の一人となかった程の民族の心は燃えていました。

何故こうなったのか、これは誰の責任だったのか。象徴天皇か、陸海軍の統率者か、はたまたジャーナリストか。戦争の長い間、全国民を麻痺させ、大切な自分の命を無視し、自分も殺し、多くの罪もない敵国の人々幾百万を皆殺しにしてしまったのです。生きている私はともかく純な若者の霊がどこへ行くのか、狂わして しまったほんとうの責任者は、学者も教授連、専門家もごまかさないで口をつぐんではいけないし、又国民総べて深く内省すべきでしょう。私は前述しましたが 再度戦争に殉じた若者の魂に捧げることばを次に送ります。

戦場短歌

戦場：轟音と火を吐く砲を見てあれば砲手の操作自身に満ちてり
突撃：占領を疑わぬ兵ひとも吾も敵陣に散れ敵陣を突け
夜：風もなく砲兵陣地月白し
別離：花の頃巡視したまいし兵士らにたばこたまいし閣下今亡し
兵の負傷：単眼でもきさまらのつら見えるぞと事もなげに言いしらじらと笑む
母国への便り：模範文そのまま写し手紙かく兵らにわれは文字など教う
故国：ふくふくと布団に寝たる夢を見る夢に見るさえ楽しかりけり
突撃直前：城壁は一弾一弾と崩れ行けりたかぶる心見つつ待期す
万里の長城：故里はいづこの方か兵ひとり月出づる空おがみにけり
夜行軍：夜行軍つづける馬が歩みつつ居睡りをせり頭おとして
玉砕：城門の破れ目指して突入せり一団の兵遂に帰らず
別離：別れ惜しむ兵ら杯をいくたびも吾に呉れたり泣く者もあり
回想：梅干と切干の汁日毎食えり古の兵何食いたりし
月の行軍：月影の寒きを背に今日吾はものな思わず国がためいく
中国の土：あかあかと入り陽照り映う廟の屋根青き甍に鳶の鳴き居り
故郷：読み終えし手紙なれども数日は机の上にわれ置きにけり
漢口陥落：喉元に止めてとまらぬ万歳を漢口陥ちて怒涛の如し
突撃の前夜：今宵一夜の命と決めて忝（かたじけ）のなし恩賜の煙草面寄せて吸う
命愛して：明日越えん修水河畔に屯して今宵一夜の命を恋えり

戦争短詩

『赤いリンゴの思い出』

あの駅頭で　愛国婦人会の人達が　真紅な青森リンゴをたくさん　兵隊のぼくに呉れた　訳のわからぬ涙が出てどうしようもなかった　船の中で出してみる。

お国の匂いを乗せた　赤いリンゴに　ぼくたちは　あたらしい発足の声を　聞いていた

ぼくたちの遺骨を頼みます　ぼくたちは今笑っているけれど　心では皆泣いているのです　あなたたちのご親切に　さよなら　祖国よ　永遠に

『尊き回想』

バンザイの旗の片隅で　母は黙って立っていた　何か言おうとして　口を開いたまま　二、三歩退いていった

私はその時ほど　強い母の眼をみたことはない　私はハッとして　目をそらして天に向ってバンザイを叫んだ　動く車の中で　今一度母の目を　眼の光を見届けたい衝動にかられた　慌てて窓を開けた時はもう母の姿は私の視野から消えていた　見送りの中で　日の丸の旗の波だけが　はたはたと　私を送っていた　静かな魂　強き子供への愛のため　生き抜こうとする人の　寂又とした余生を　物語るか如く　往く子をいやいたむ如く　あらゆる世の情けを　あの眼の光にこめて　その後　幾度となく母の姿が　頭の中を走っていった　突撃の異常感情の頭の中に　熱帯のジャングルに　極北のシベリアに　母の姿は尊い光であった

前線から後方警備へ

私は湖北方面の戦場で約四年の間 中共軍の十九路軍、更に代った新四軍と対陣し砲火を交え、南方に移ってインドのインパール作戦に参加し揺動部隊としてハイフォン近くまで侵出、砲九門で敵の背後をおびやかしその主力を牽制し、我が軍の前進を助けたのだが、日本軍の航空機が制空権を完全に握っていた昭和十

八年の初期までは砲兵隊の力は功を奏したのである。

しかし忘れられない戦闘で敗戦の思い出がある。湖北の山脈の中で敵襲に会い大砲一門を奪われそうになった激戦であった。もしこれを失うようなことがあれば切腹もの。私は中隊長三名を集め、兵には全員騎兵銃に銃剣をつけさせ、白兵戦で敵陣に切り込むことを命令したのだ。

真夜中の突撃：敵陣地這い進み寄る午前二時　未だ地熱の残れるを感ず

歩兵並みの戦闘で攻撃をかけ、やっと砲を奪い返すという敗戦で中隊長一名、兵十二名を失うという結果にもなったこともあった。

これらの作戦を終えると前線より退いて広島師団より南京支那派遣軍総司令部付となり兵器部配属となり、半年もせず単身日本の師団に転属命令を受け、軍装し鉄道で中国より朝鮮釜山港まで直行、関釜連絡船に乗船の直前、今出帆したばかりの船が船首を空に爆沈されたのです。アメリカの潜水艦が既に海峡を封鎖してしまっています。

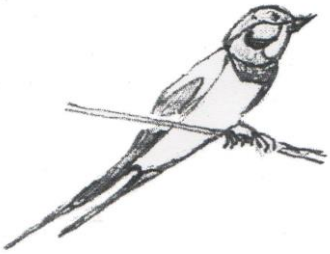
止むなく南京総司令部に連絡、その命令を待つと電話は、お前は九州の旅団に復帰せよとの返事、この旅団は日本防衛の任務で目下北上中、合流せよ、指揮に入れとのことです。関釜連絡の情報は軍の情報に入っているのか旅団は満州の奉天（今の瀋陽）にあることが判明しました。

旅団に復帰したとき私は大隊長勤務の為、前関東軍野戦倉庫に砲弾の受領に行きましたが、関東軍全員は既に南方に転出し軍は留守部隊か少数の空っぽ、十二の大倉庫は二カ年以上の糧秣を在庫のまま、兵器、弾薬はこれこそ空っぽです（かっての精鋭関東軍は連絡船の撃沈を受けへ軍人、資材共、洋上より海も中へ藻屑と消えたのです）。

弾丸のない砲兵はもう何の役に立たず、私は旅団長の命令で兵站司令官となり、前野戦司令と交代、野戦倉庫の管理、貨物列車、トラック、兵三百が指揮下に入り新任務に就いたので、全く数日のアッという間の変わりようです。

（本編づづく）

さて次回はいよいよ昭和十九年から、日本は敗戦に向けてひた走ります。そんな時代、ソ連国境付近の父に起こることは何か。



戦争の思い出（最終回）

T. C.

五、月ヶ瀬への疎開

空襲で学校が焼け、行くところがなくなってしまったので、私は父母の故郷である奈良県月ヶ瀬村へ疎開することになった。

長姉は結婚していて、三歳になる男の子があった。夫は兵隊に行っていたので、姉とその子供と、母と私の四人で疎開した。他二人の姉は、学校からの挺身隊で軍需工場へ行っていたため、大阪に残った。亡くなった父は一人っ子だったので田舎に肉親がなく、私たちは母の実家へ身を寄せた。

母の実家の藁小屋を改装してもらい、六畳二間と二畳の台所が出来た。そこに四人で住んだ。電気も水道も風呂もなかった。トイレは外に作ってもらった。畳は藁を敷き詰めた上に上敷を被せただけのもので、下から風が入って寒かった。電気がないので、夜はランプの灯りで過ごした。毎日ランプのホヤを拭くのが私の仕事だった。藁小屋を改造した家はほんとに見すぼらしかった。

水は、実家の井戸水を汲みに行った。私たちの住居から三百メートルくらい離れていた。風呂は、もらい風呂。母の実家の伯父と叔母には何かにつけてお世話になった。親戚のご厚意で、少しながら田畑も貸していただいた。

私は学校に行ったが授業はあまりなく、農繁期には遺族家の手伝いで、田植えや草刈り、稲刈りなどの労働をした。友達はみな慣れたもので、手さばきも上手だったが、大阪育ちの私は下手で人よりも作業が遅く、すぐに疲れて迷惑を掛けた。それでも友達はみんなよくしてくれて、私の家を貧乏だと笑う人もなく、下校の長い道を楽しく笑いながら帰宅した。

終戦後すぐ大阪へ帰るつもりだったが、大阪は食糧難で大変だという姉たちの話を聞いて、しばらく田舎に留まることにした。植えてあった芋や麦などの作物が出来てきたので、それらを食べて飢えをしのいだ。

そのうち長姉の夫が復員してきたが、アメーバー赤痢の菌をもらって来て、すぐに亡くなってしまった。そのとき、姉は三十四歳で子供は四歳。姉はその数年後に再婚して、私と母の二人になった。

結局、月ヶ瀬村には十年間住んでいた。私ここで夜学に行き、成人教育も受けた。二十歳を過ぎ、そろそろ友達も婚約とか結婚とか言い出すようになった。私は、こんな藁小屋に住んでいるようでは誰も貰い手がないだろうと思っていた。

それを察した母が「大阪へ帰ろ。もう大阪でも食べて行けるやろ」と言い、私と母は大阪の姉たちの所へ戻った。私が二十一歳の春だった。

私はこうして戦中戦後を田舎で過ごしてきたが、大阪に残っていた姉二人は終戦後も大変な苦労をしたらしい。とにかく食べる物がない。道端には闇市が立ち、たくさんの物資は並んでいるのだが、それを買うお金がない。だから姉たちは買い物のために農家を訪れ、米や芋を買って飢えをしのぎ、時には残りを闇市へ売りに行くこともあったという。

しかし、そんなことは禁じられていたので、警察に見つかれば取り上げになる。それでも食べていくために姉たちは買い出しに出掛けた。大阪駅のホームは人がいっぱいで、ぎゅうぎゅう詰めの列車の窓から乗り降りしたらしい。

「あんたはええやん。買い出しにも行かず、お母さんと暮らして」と、姉たちからよく言われた。

月ヶ瀬村にも、たくさんの人たちが買い出しに来ていた。みんな大きなリュックを背負い、さらに両手に持てるだけの荷物を持って帰った。ある人は、警察に見つからないようにと、お腹にお米を巻いて帰った。毎日そうしているうちに、お腹が冷えて病気になったという話を聞いた。

現在では食べ物が溢れるようにあり、飢えで困ることなんて考えられない。こんな豊かな時代を迎えるとは想像も出来なかった。戦後、日本は急速に復興し、今に至っているが、それは数多くの犠牲の上に成り立っているということを忘れてはいけない。

あのときの苦労を思い出し、お世話になった方々や、犠牲となられた方々への感謝の気持ちを大切にしながら、余生を過ごしていきたいと考えている。

六、終戦の日

終戦の日のことは、よく覚えている。昭和二十年八月十五日。疎開先の月ヶ瀬で、その日、私は友達の家にいた。友達のお父さんが「〇〇ちゃん、戦争終わったで」と言われた。

「どっちが勝ったん？」と、私は、とぼけたことを言った。

「負けた。日本が負けたんや」と、友達のお父さんが言われた。

その時、涙がこぼれた。今までの苦労はいったい何だったのか。

思わず、友と一緒に「東條英機の馬鹿野郎！」と叫んだ。東條英機は当時の総理大臣で、戦争の張本人と聞いている。この人のせいで私の学校は焼け、兄は戦死し、家族はみんな苦労している。日本中、そんな可哀想な家族でいっぱいだ。空襲でたくさんの人が亡くなり、街は焼け野原。広島と長崎には原爆が落とされた。すべて戦争のせいだ。

神風が吹くなんて嘘だった。みんな騙されていた。お国のためと死んでいった人たち。みんな、ほんとはもっと生きていたかったに違いない。空しくて、悔しくて、頭の中が真っ白になった。

涙をぬぐい、空を見上げると、真っ赤な太陽がさんさんと照りつけていた。暑い暑い夏休みの午後だった。

七、あとがき

空襲のこと、集団疎開のこと、戦死した兄のこと・・・、良い思い出は何もない。嫌なことは人に言うべきではないと固く口を閉ざしていたのだが、戦後七十年を迎えた今日、八十二歳と九ヶ月にして、筆を取ろうと思い立った。

もはや、口を閉ざし、目を背けている時ではない。だんだんと体験者が少なくなってきた今日、自分の記憶がはっきりしているうちに、戦争の思い出を若い人たちに語っておきたい。戦争の悲惨さを次の世代に語り継ぐことが、何より大切な使命だと考えて、このように拙い文章を記した。

自分の子や孫たちが、二度とあのような無残な体験をしませんように。今の平和がいつまでも続きますようにと、祈らずにはいられない。

平成二十八年一月

大人の今昔物語（23）

石川吾郎

今回は、日本にあった秘密の里のお話しです。教科書に出ない度は一／五。

大峰を通る僧、酒仙郷に行ったこと

（巻第三一ノ十三）

今は昔、仏の道を行う僧がいた。大峰という所を通る間に道を間違えて、見覚えのない谷の方に迷い込んでいったが、そこで大きな人里に出た。

この僧「嬉しや、人の家を訪ねてここがどこかを訊いてやろう」と思っていると、この里の中に一つの泉があった。石を敷き詰め立派にしている。その上に屋根をつけて覆っている。これを見て僧が泉の水を飲もうと近づくと、その泉の色ははなはだ黄色がかっている。「なぜこんなに黄色いんだろう」と疑問に思ってよく見ると、この泉は何と、水ではなくて酒がわき出ているのだった。

この僧、びっくりして茫然としていると、人が集まってきて「おまえさんは何者だ」と問いつめてくる。僧は大峰を通っていて道に迷い、思いがけずここに出てしまった経過を答えた。里人の一人が「さあ、おいでなさい」と、この僧を連れて行こうとするので、僧は気が動転して「どこへ連れて行かれるんだ。殺されるのではないか」と思ったが、断ることも出来ないので、この人の後に付いてい

った。すると賑やかで裕福そうな大きな家にきた。その家の主らしき人が出てきて、ここに来たわけを僧に尋ねるので、同様のことを答えた。

その後、主は僧を家に上げ、食事を食わせてから、この主、若い男を呼び出し「この人をいつもの所に連れて行け」と命じる。僧は「さては主はこの里の長者なのだな。自分をどこへ連れて行こうとしているんだ」と、恐ろしくなってきた。命じられた若い男「さあこちらへ」と行こうとするので、僧は恐ろしかったがどうしようもなく、言われるままについて行った。

するとぽつんと離れた山があるところに連れてきて、その男が言う「実はおまえさんを殺すためにここに連れてきた。これまでもおまえさんのように、ここに来た者を帰らせてこんな里があることを言いふらされるのを恐れ、みんな殺していた。だからここのことは誰にもまったく知られていないのだ」と。これを聞いて僧は、すっかり取り乱して「自分は仏の道に仕える者。人々のためと、大峰をめぐる間に発心をして、一心に修行をしてきた。たまたま道に迷い思いがけずにここに行き着き、殺されようとしている。死ぬことはだれも逃れられないので、それは免れようと思わない。ただあなたが、仏に仕える罪のない僧侶を殺そうとするのは、罪が深いので、もしや助けて下さらぬか」と言うと、男「実におっしゃることはごもっとも、助けてあげたいが、もし帰ったときにこの里のありさまを言いふらされるのが怖いのだ」と言うと、僧「自分はここの里のことは絶対に他言しません。この世の人、命以上に大事なものはないので、命さえ助けていただければ、このご恩をなんで忘れましょうか」と言う。男「おまえさんは僧侶の身。仏の道を修行される身。お助けしよう。もしここのことを他人に話さないと約束すれば、おまえさんを殺したことにして助けてあげよう。」僧、喜んでいろいろ誓いごとを並べて、絶対に他言しないと繰り返す。男「絶対に約束を破らないように」と返す返し口固めをして、道を教えて許してやった。僧は男に礼拝をして「来世までこの恩は忘れません」と約束をして、泣く泣く分かれ教えられた道を進んでいくと、通常の道にもどることができた。

＊　＊

さて、もとの家に帰るとこの僧、口が軽く軽率な僧だったので、早々と会う人ごとにこのことをべらべらとしゃべってしまった。これを聞いて人々はみな、もっともっとと催促するので、僧はこの里のありさまや酒の泉のあったことなど、何から何までしゃべってしまった。すると勇み肌の若者たちが「こんなすごいことを聞いて、見ないでおくわけにはいくまい。鬼や神なら怖いかもしれないが、聞けば人間のようだ。ならばどんなに勇ましい者といってもそれほどのことはないだろう。ぜひ行ってみよう」と、若者の中で勇敢で力が強く、腕に自信のある五六人ばかりが、おのおの弓矢をもち刀をさげて、この僧を連れて繰り出そうとはやったのを年寄りが制止する。「止めておけ。相手は土地勘があるから、対策が立ててあるだろう。こちらはアウェイだから不利だ」と。若者たちは言い立てたことなので、あとに引かず聞き入れない。また僧もはやし立てたのだろう、そろって出発してしまった。

＊　＊

一方、この出発した者たちの親や親類たちは、不安がり、嘆き合うことかぎりない。案の定、当日も帰らず、翌日になっても帰ってこない。二三日経っても帰らないので、さらに悲しみ嘆いたが、どうしようもない。こうして何時までも帰って来なかった。探しに行こうという者も誰一人なく、とうとう帰る者はだれもいなかった。彼らは恐らく一人残らず殺されてしまったのだろう。このことが結局どうなったかということは、何の情報もないままになってしまった。つまらぬことをしゃべった僧であったことだ。自分も死なず、多くの人も殺されずに済んでいたならば、どんなによかったことか。

＊　＊

したがって、人というものは、約束を破り、おしゃべりすることは、厳に慎むべきだ。またたとえ僧がおしゃべりであっても、無謀に出掛ける者たちもたいそう愚かだ。

その後、その場所は噂にも聞こえてくることもなかった。この話しは、例の僧が語るのを聞いた人が語り伝えたということだ。

《コメント》

この話しは文字通り酒仙郷の伝説です。この種の話しは中国の詩人・陶淵明の「桃花源記」の系統を引いていることは容易に想像できます。ただ陶淵明が平和的なのに対して、この話しは血なまぐさいのが気になりますね。

孫ウォッチング（6）

福田　圭

二〇一六年五月一〇日（火）・十一日（水）

光君（ペンネーム）の家族が初めて遠出して鳥取から大阪にやってきた。誕生から七か月余り経っている。前回は初めて握手をした話をしたが、今回はハイタッチをする。寝返りを始めているらしかったが、目の前で寝返りを見せてくれたのは初めてである。

初めて大阪にやってきたと思ったら、息子夫婦は梅田散策に行ってしまった。それも両日ともの外出である。しかも私の妻も用事で出かけていく。おじいちゃんが一人で一日三時間ほど光君の面倒を

見ることになる。哺乳瓶でミルクを飲ませる。ぐいぐいぐいと力強く、しかも自分で手を添えて飲む。ああ光君は自立に向かっている。もうすぐハイハイもできるようになるのだろう、などと調子のよいことを考えていると、お腹がいっぱいになって眠くなり、体温が上がったのか、顔を手で掻き出した。少しアトピーの傾向があるのでやめさせようとすると、なお顔を掻きむしる。おでこから少し血がにじむ。鳥取に「孫ウォッチング」などと言って観察するだけなら、お気楽なものだが、一人で世話をするとなると責任の重さが違う。「子育ては大変だ」ということをすっかり忘れていた。十日はおしっこをしたのでおしめを変えた。最近のおしめはパンツ式で、「昔取った杵柄」と、簡単には交換できない。十一日にはウンチである。パンツ式は、ウンチのついたパンツを上手に脱がせるのが難しい。濡れティッシュでお尻をきれいにして、またはかせるのが大変である。早くおとうさん、おかあさんよ、帰ってきてくれと思いながらも、あまり弱音もはけない。

嬉しいような、大変なような、初めての光君の来阪であった。息子夫婦よ、子育てご苦労様。

B級サラリーマン渡世譚（35）

明石　幸次郎

始発の地下鉄がゴォーという音で、明石は、寝不足でボーとした気分を振り払う様にして、ベンチから立って、ドアが開くと同時に車両に乗り込んだ。車内は、ざっと見渡しても数人しか乗客はいなかったが、一様にシートに腰掛けながら腕組みをして、頭を下げて眼はつむった格好をしていた。明石もシートに座ったと同時に眼を閉じて腕組みをしながら、今日の行動予定のあらましを頭に描いた。

二駅目で、千里中央行に乗り換えて、新大阪に向かった。車内は明石と同じようなスーツを着て、ボストンバックを持ち見るからに出張する格好をしたサラリーマンが停まる駅ごとに乗って来た。電車が新大阪駅に着くと、大勢の人達が一斉に電車からホームに下り、速足で階段を下りて改札口を通り抜け、地下道を通って新幹線の改札口を目指して歩いた。

新幹線の自動改札に切符を通して、駅構内に入り、直ぐに案内板を見て、東京行きの始発列車のホームの番号を確認した。ホームに上がると売店を見つけ、週刊誌とコーヒーを買って既に停車している列車に乗り込んだ。切符に印字している三号車十二番C席を確認して三人掛けの通路側の席に座った。

M居とN川君の二人は、まだ来ていなかったが、出発まで、十五分ほど時間があったので、朝食を済ましてしまおうと思い立ち、前の席からテーブルを取り出して、その上に鞄からサンドイッチを取り出して、コーヒーカップと共にテーブルに置いた。それから買った週刊誌を、パラパラとめくり、サンドイッチを口にほう張り、コーヒーを飲みながら、一気にかたずけてしまった。

丁度食べ終えた時に、列車の通路をN川が席を確認するような格好で明石の方に近づいて来たのが見えたので、手を上げて、招いた。N川は笑顔で頷き、明石の席の横まで来て「おはようございます。もう、着かれてたんですか、早いじゃないですか？」と挨拶をしたので、テーブルを元にしまって、席から立ちながら「おはよう。遅れたら、大変やと思い、始発の地下鉄で来たんや」と言いながらN川を真ん中の席に座らせた。発車十分前位になって、アタッシュケースを下げて、M居が「おう、君ら早いなぁ、お早う。明石は昨日は遅くまで飲んでたので、遅刻するかと心配してたが、俺が最後か。明石、エエ鞄持ってるやないか？」と言いながら、二人を立たせて、奥の窓側の席に座った。

M居は、席に座るとアタッシュケースを膝の上に置き、中から日経新聞を取り出して、足元にアタッシュケースを置いて、新聞を読み始めた。

N川はしきりと自分の腕時計を見ながら「あと、五分で発車ですね。明石さん、始発にも関わらず、ほぼ七割方、席が埋まりましたね。日本の企業戦士は早朝からよく働きますね。我々もその一員ですかね～」と話しかけて来た。

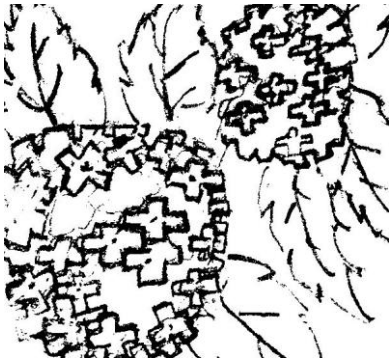
明石は残ったコーヒを飲み干してから、「京都、名古屋で、満席になってしまうね。始発で東京に行って、終電で帰ってくる日帰りの戦士も多いのやろね。N川君は立派な企業戦士やで。俺なんかは、戦士見習いで、これからもずーと見習いのままで、戦力にならんかもしれないわ」と応えると、じっと新聞を読んでいたはずのM居が「明石、お前、何を朝から言ってるのや。戦力になるも、ならないもないんや。輸出部に来たからには、俺らは選ばれた戦士や、という自負を持たないとアカンのや。これから、M商事とある意味では、戦わないといけない場面が出てくる。今日から、お前も輸出部の戦士で、早く戦力になって欲しいと思うからこそ、M商事に連れて行くことにしたんや。今日からは、お前も戦力や！」と厳しく言われてしまった。

始発列車は、定刻になったのか、すうっと静かに動き出した。三人は京都駅に着くまでは、だまって、それぞれ、M居は引き続き、日経新聞に眼を通し、N川は、英語の本を読みだし、明石は週刊誌に連載されている、司馬遼太郎の“街道を行く”を読んでいた。暫くすると、うとうとして、明石だけが居眠りをし始めた。

名古屋に着くと何人かは降りて、今度は名古屋の企業戦士が乗り込んできて、車両は、ほぼ満席になった。新幹線が名古屋を出たあたりから、M居とN川は、M商事との打ち合わせ内容に付いて、お互いの考えとM商事経由で入って来た現地の情報を確認をし始めた。昨日、別室で二人は話をしていたので、二人の考えは、纏まっていると思っていたが、いくらまで、値段を下げるかは、二人の意見は違っており、N川はA杉課長と同じ考えで「商売は、注文を取ってなんぼや！取らないと、仕事は始まらないわ。ウチの工場の連中は、最初から限界利益がなんぼないと受注するな、と直ぐに言いよる。そんなもんは、営業が注文を取ってから、限界利益を生むように工夫するのが、工場の仕事やないか?ライバルと性能差が無いものを、ワシらに他社より高く、多く売れ売れと言ってくる。高く売ろうと思えば、ライバルとの差別化と工場原価の引き下げが必要や。そしたら、ダブルで利益が得られるわ。それが分かってない」と言うのが持論であり、N川もA杉課長の考えに影響されて、A杉課長の考えに近い。M居は、その考えはメーカーの工場の現場を知らない商社的な考えで、A杉課長は商社出身だから、利益確保に対する考え方が違うと言うのが持論であり、利益も確保しながら、受注しないと、利益のない商売は意味がないという、極めてまともな考え方を持っており、これを営業の理想としていた。

明石は、工場の経験から、工場はコストダウンと経費を削減するためには、あらゆる所まで細かい指示が出され、その実行と成果を出すことを常に求められていた。それへの疑問とかは、一切許されない空気が工場には流れていた。

工場サイドは、営業が少しでも高く売ってくれれば、工場は、少しは、楽になるのにと常に思っている。明石は営業に来たからには、少しでも利益が出る価格で売るのが営業の使命であり、これを実行しないといけないと思っていたので、M居の考えに賛同しているが、ライバルが存在しているからには、現実はそう上手くは行かず、工場が求めている利益だけに拘っていたら、注文を逃すケースが出てくるのではないか。明石はA杉課長、N川の考え方なり、営業のスタイルも今後、学ぶべき点があるのでは、二人の話を聞きながら思う様になってきた。



見る力と考える力

大江雉兎

必要があって調べてみたところ、携帯電話にカメラが付くようになったのは二十年近く前のことらしい。国内メーカーの携帯電話は、世界基準に比べて独自の進化を見せたことから「ガラパゴス化」と称されるが、カメラが搭載され、それが高機能化していったのは、ガラパゴス化の最たるケースのようだ。もっとも、最近では機能の一つに電話が含まれるとする方が正しいぐらい多様な使い方ができる携帯デバイス（スマートフォン）が一般的になっているので、カメラが搭載された携帯電話という括り自体が古いものとなっている。

さて、トータルなモバイルツールなのか携帯電話なのかは措くとしても、カメラが日常的に持ち運びできるようになったのは、ここ十数年の間で日本人の生活環境に起きた大きな変化といっていい。街なかでノラ猫を見かけたらパチリと一枚、きれいな夕焼けに出合うとパチリと一枚、思わぬ有名人を見かけるとこれまたパチリといった具合に、視覚の切り取りがごく日常的に行われるようになっている。何か突発的な事件に立ち会おうものなら、周囲の人垣のここかしこから無数のスマートフォンや携帯電話が差しだされてパチリパチリと鳴り響く。オートフォーカスはもちろん、手ブレ補正や顔認識など、機能も高性能化しており、初期の携帯カメラのような、撮ってはみたものの……といった期待外れを演じてくれることも少ない。直感的に切り抜いた視覚が、現場での印象に近い形で画像化され、保存されるようになっている。柳田国男がその慧眼をもって世相人心の変化を綴った「明治大正史世相篇」は社会における物質的な変化が人々の感性をどのように変えたかを剔出した名エッセイなのだが、僭越にもその顰みに倣うのなら、今世紀の初頭に起きた携帯カメラの普及という現象は、日本人のものを見る能力に影響を与えたように思える。

過激な言い方になって気が引けるが極論を承知でいえば、視覚を切り取り保存する能力を身につけることの代償に、私たちは現場でものを見る力を失ったようだ。なにがしかの刺激を受けて直感的にカメラを向けはするものの、そうすることによって何を撮っているのかを強く意識するわけでもない、時間が経った後に切り取られた視覚を再検証するのならまだしも、切り取りっぱなしにしてしまうことも少なくない。条件反射のようにカメラを向けるだけで実際は何も考えていない、そんな状態に陥っているのではないだろうか。携帯カメラがこれほどまでに普及していなかった頃は、現場での印象をもう少し大切にしていたはずだ。カメラという装置自体が大衆化する以前までさかのぼるとすれば、インパクトのあ

る視覚印象に遭遇した時は、その印象に対して、手を尽くして代替物を作ろうとした。瞬時に素描を残す人もいれば、言葉に置き換える人もいた。現代は言葉が重みを失っていると言われることもあるが、長い年月にわたって言葉の重みを担保していたものがあるとすれば、それは一瞬にして消えてしまう視覚印象への執着だったのかも知れない。

先日、京都文化博物館で開催されている「イングリッシュガーデン展」を見る機会があった。ロンドンのキュー王立植物園が所蔵するボタニカルアート（植物画）を中心とする展示なのだが、カメラによる記録が行われる以前の観察眼には驚かされるものが多い。肉眼をもってして、意識的に見て、そして記録するとはどういう行為なのか、そんなことも考えさせる展示である。光学的な研究成果に基づく現代の高機能カメラを使えば、より実物に近い、正確な画像を残すことができる。しかしカメラによって保存された視覚情報は認識の領域に昇華されたものではない。科学的な意味での正確さが伴っていたとしても、認識に届かないのなら存在していないのと変わらない。カメラ以前の世代は、視覚印象を認識に引き上げる努力を否が応でも強いられていたのに対し、カメラの出現はその労力を軽減することとなった。そして携帯カメラが普及するようになると、そういう方面で努力をする必要さえ感じなくなったのかも知れない。現場でものを見る力を失ったというのは、ひいては考える力の喪失でもある。

このように述べてくると、カメラが出現する以前の感性を過大評価しすぎなのではないかとの批判も出るだろう。絵画表現であれ言語表現であれ、それぞれには時代背景があり、時代の必然によって生み出されたのだとすれば、現代には現代の必然が生むところの表現がある。それがなんであるかは、今の私には分かりかねるが、古きものばかりを闇雲に高尚なものと崇めたてまつる姿勢は、対象そのものに向かう視線を曇らせる。カメラ以前の、肉眼による観察眼を精緻ですばらしいと連呼するのは、その曇った視線がもたらした虚像なのかも知れない。あるいは、引き合いに出した「イングリッシュガーデン展」にしても、二百年以上に及ぶキュー植物園の所蔵画からの選りすぐりなのだから、それと平均的な現代人を並べるのは根本的に無理のある比較である。それ以前に精緻な観察眼を持つ現代のアーティストが皆無だというわけでもない。しかし評価のスタンスに偏りがあることを認めたとしても、カメラ、とりわけ携帯のそれに依存するあまり見ること考えることが疎かになりがちの風潮は、自省も含めて強く意識しておきたいことではある。

編集後記

いよいよ夏の参議院選挙が迫ってきました。今の調子でいけば、自公の圧勝で安倍政権は憲法を変えてくるでしょう。先の安保法制で自衛隊の海外派兵が現実化し、いつでも、どこでも戦争に参加できるようになりました。戦争放棄をうたった憲法は解釈変更され棚上げされました。

この矛盾した状況を、憲法を変えることで解消しようと安倍政権は、憲法を変えようとしています。

まったく不謹慎な独裁的な政権です。解釈変更という、とんでもない行為が許されてしまうと、憲法は死にます。政治家が好き放題になんでもやれます。民主主義がないがしろにされ政治の暴走が国民を苦しめます。

この期に及んでも、政治的な無関心が蔓延するなら、先の世界大戦での反省はなんだったのか。日本人は何も反省していないし、考えてもいない。優秀だとみられていた日本人は嘘だったのか。

まだ、左翼がどうの、共産党がどうのといぶかる御仁がいますが、冷静に考えてみてください。今のまま安倍政権に信任を与えれば、とんでもない日本になって我々の生活が壊されてしまいます。

どうか、子々孫々の生活を考えて悔いのない投票行動をしないと孫子に申し開きができない。

（嘉）

MEMO

連載 女９０年の軌跡 眞糀さん

どう思う　前向きに捉えると得

耳をすませば、あの独特の哀歌が聞こえてくる。八代亜紀さん、水前寺清子さんの力強い歌。

前を向き人生を歩む。こんな時こそ心にひびく歌がある。

或るコンサートの会場へ足を運ぶ。

大阪を歌謡曲の聖地に。

昼の部、三十九曲。喜寿の年齢を迎えて一人舞台で、自分がやるべき事が自分を支えたのだと力強い幸せを感じさせられる歌ばかり。

でも、私が口にした唄は“買いものブギ”“夢は夜ひらく”

時代をこえて懐かしい唄も曲にリズムがのりすぎて歌詞が不明になったこと。

高齢になれば体に大なり小なりの不具合があるもの。目はいいけど、耳が遠くなったせいか、今日この会場に来て耳をすまして聞いただけでも、ささやかな幸せ。まだ機能が生きているのだと思う。

人生をいかに楽しむか。まだ自分を受け入れること。さまざまな悩みを乗り越えて今を生きているということは…。

体力はなくなったけれど、まだ少し知恵がある。眉間にしわをよせていても幸福はよってこない。

「ああ、今日はしんどかった」と思わず口にしてしまった。

朝起きてみると、メモ用紙に大きな字で

「安べエー散歩すみ、便もすみ」

我が息子の字。

年をとるということは宿命であったとしても、こんなささやかな幸せを体いっぱいに感じられるとは、老いの輝きだろうか。

年よりの冷や水

九十才になったら、突然手が上がらなくなる、腰が痛い、足が痛い、耳は東京へ。自分もふくめて回りには、そういう人がたくさん。

大体症状はいろいろだが、放っておくと治る。原因は追究しなくてよい。医者に行っても治らない。

「水の入ったペットボトルを振りまわしたらいい」いろいろ教えてくれる。

痛いからと言ってかばっていると却って筋肉が固まってしまうのかも。

このところ人の出入りがはげしくて二週間連続して自彊術を休んでしまったら大変、腰、肩、首、頭、つっぱって痛く、フトンの中でもぐもぐ。手足をもんだりイロイロ。

運動不足が、いかに体に悪いかを実感。久しぶりに教室で体を動かしたら、つきものが落ちたようにスカッとした。今夜はよくねむれるぞ。ああ、ほんとうに運動って大事だ。

特に、筋肉をゆっくり伸ばしたり、さすったり。運動は元気の秘訣だ。

かなり無理をして伸ばしたら、筋が張ってパンパン、ギクッ、イタタ…。

これが、年寄りの冷や水か…。

ふん切りをつける

なるべく物を持たず、少ない荷物で暮らす。近頃は、そういう生活にあこがれる若い人がふえているとのこと。若い時は、多少の暑さ寒さも気にならなかったが。

二〇代、三〇代で子供を産んで、育児も介護も終わった今、人生の残骸のような荷物を、一人で片付け、捨てる日々。だが、捨てても、よくまあこれだけ集めたと思うほどある。

高度成長を経て、裕福になった分だけ不用品が多く、これはまだ使えると、取り除けたら「絶対に使わへんで、おばんは、ゴミ屋敷にするつもりか」一喝。

物には思い出もあり、誰かに、また作り手の思いがあるのだが。捨てるのは、パワーがいる。

こんな思いをして捨てる位なら、ゆき着くところまでゆくと、やっと「もういいか、これ位で」と思うのか、

私もどうやら、ぼつぼつ終わりが近づいてきた。買うより、捨てることばかり考えている。

俳句

土田　裕

歴代の住持の墓や苔の花

木の匂ひ草の匂ひや夏来る

薫風や
　くるりくるりと水ぐるま

古民家にこもる匂ひや
　梅雨近し

あじさゐの
　蒼さに澄みし水鏡